

第2章 まちづくりの将来展望

2-1 まちづくりの視点

地域特性と課題から、まちづくりの視点を以下のとおり定めます。

運河から始まるまちづくり

都心とみなとをつなぐ中川運河は、港北エリア内を東西に延びる港北運河、荒子川運河とともに、かつて水運による物流の軸として名古屋の経済・産業の発展を支えてきました。しかしながら、その後、水運物流の減少を背景にその役割が小さくなり、今ではこの広大な水面が都心の貴重な水辺空間として注目をあつめています。

物流を担う運河からにぎわいをもたらす運河へと再生し、再び水辺空間とともにまちを活性化するために、港北エリアにおいては、エリア内を縦横に巡る運河を活用して地域住民や来訪者が水辺に親しめる環境を整備し、まちの賑わい創出・回遊性向上につなげていくことが求められます。また、運河のポテンシャルを最大限引き出す水辺の活用を通じて、港北エリアの「運河のまち」としてのイメージが際立っていくものと考えられます。

交通基盤の活用

港北エリアには、都心とみなとを結ぶ地下鉄名港線、あおなみ線が通っており、中川運河では、水上交通の「クルーズ名古屋」が運航されています。また、エリア内には、国道1号、国道23号、東海通、名古屋高速道路なども通っており、港北エリアでは、これらの交通基盤による優れたアクセス性を活かし、交流人口が増加することが期待されます。

港北エリアの交流促進には、賑わい機能の誘導とともに、公共交通は使いやすさ・分かりやすさに配慮し、誰もが安心・安全に移動できるユニバーサルデザイン[※]の充実を図るなど安心・安全に移動できる環境整備を行うことで、地域住民・来訪者の利便性を高め、まちの回遊性を向上させることが有効です。そしてそれが都心とみなとをつなぐ拠点として相応しいまちのイメージ向上にもつながると考えられます。

※ユニバーサルデザイン：製品、環境、建物、空間などをあらゆる人が利用できるようにデザインすること。

緑の活用

従来の経済成長、人口増加等を背景とした緑とオープンスペースの「量」の整備に対して、近年、社会の成熟化、市民の価値観の多様化、都市インフラの一定の整備等を背景とし、緑とオープンスペースが持つ多機能性を最大限引き出すことが重視されてきています。

港北エリアのまちづくりでは、土古公園、荒子川公園等の公園・緑地を活用し、そのポテンシャルを柔軟な発想で引き出すことで質の高い空間を創出し、中川運河等を活用した水辺に親しむ環境整備と合わせて、港北エリアならではの魅力的な都市環境を創造していくことが求められます。

選手村後利用との連携

アジア競技大会の選手村は、大会後もレガシー（遺産）として有効活用されるよう、大会後のまちづくりにおけるハード・ソフトの取り組みとの連携が重要です。

アジア競技大会の選手村後利用では、港北エリアのイメージアップや魅力向上に資する新たな価値・機能の創出が期待されます。また、選手村後利用と土古公園や荒子川公園、中川運河等の活用が連携し、選手村後利用施設及び周辺において、地域住民や来訪者のイベント・スポーツ・健康活動、散策などに活用できる環境の創出が求められます。

グリーンインフラ[※]の展開

緑は、憩いや安らぎ等のホスピタリティの高い都市空間を提供するとともに、自然環境の力で地域課題に対応するグリーンインフラとして重要な役割を担っています。

洪水による浸水などの水害リスクが高く、また一部の市街地で火災延焼リスクがある港北エリアにおいては、浸水対策・延焼防止にグリーンインフラの展開が期待されます。

また、防災・減災のほかヒートアイランド対策や健康・レクリエーションなど、安全・快適な暮らしに役立つ機能を持つグリーンインフラの展開として、港北エリアが有する水と緑のポテンシャルを十分に活用していくことが求められます。

※グリーンインフラ：自然環境が有する多様な機能（生物の生息・生育の場の提供、良好な景観形成、気温上昇の抑制等）を積極的に活用して、さまざまな効果を得ようとする取り組み。

職住・多文化の共存

港北エリアは、住宅や町工場が混在し、お祭りなどを通じて子どもからお年寄りまで地域が繋がる「下町感」のあるエリアです。また、市域全体に比べて外国人居住者が多く、近年増加傾向にあります。

港北エリアにおいては、職住が共存した「下町感」を活かすとともに、外国人居住者を含めて新たな交流を生む開かれたまちであることが求められます。

産業・技術の活用

港北エリアは、名古屋のものづくり産業を支える企業・工場が多く立地しており、それらの企業・工場を引き続き支援するとともに、必要に応じて、工場のリノベーションや運河沿いの土地利用転換など、ものづくりのDNAを活かしたまちづくりが考えられます。

エリアの強みでもあるものづくり産業や商業など多様な企業が発展しつつ、先進技術の活用などによるイノベーション^{*}の創出が期待されます。

シビックプライドの醸成

人口減少の局面においても将来にわたり持続的に発展していくためには、日々の暮らしの安心・安全が確保され、誰もが自らの能力と可能性を最大限に発揮し活躍できるまち、未来を担う子ども・若者が育ち飛躍するまちとして、多くの人を惹きつける魅力的なまちであることが求められます。港北エリアにおいて、人々が暮らしたい、暮らし続けたい、訪れたいと思えるような、人々が憧れるまちを創造していくためには、地域に住み働く人々が積極的にまちを盛り上げていくことが必要であり、それが港北エリアのブランディングにも繋がると考えます。

シビックプライドのある人は、まちづくりへの積極的な参画が期待される「地域資源」との考えのもと、市民・地元企業・民間事業者など多様な主体が協働したシビックプライド醸成の取り組みが求められます。

^{*}イノベーション：従来の考え方にとらわれない自由な発想で、新たな価値を生み出し、人々の生活に劇的な変化をもたらすこと。

2-2 基本理念と目標

(1) 基本理念

まちづくりの視点を踏まえ、基本理念を次のように掲げます。

スマートオアシス港北

運河と緑が育む “新たなライフスタイル” の創造

港北エリアには、中川運河の水辺や大規模な公園の緑に親しめる生活環境、名古屋のものづくり産業を支えている技術など、地域固有の特徴があります。

港北エリアでは、こうした地域資源を活かし新たなライフスタイルを創造する、「居住」「産業」のバランスがとれた大都市名古屋の「憩い」「賑わい」のエリア（＝スマートオアシス）となるようなまちづくりに取り組みます。

(2) 目標

基本理念に基づき、次の3つの目標を設定します。

3つの目標

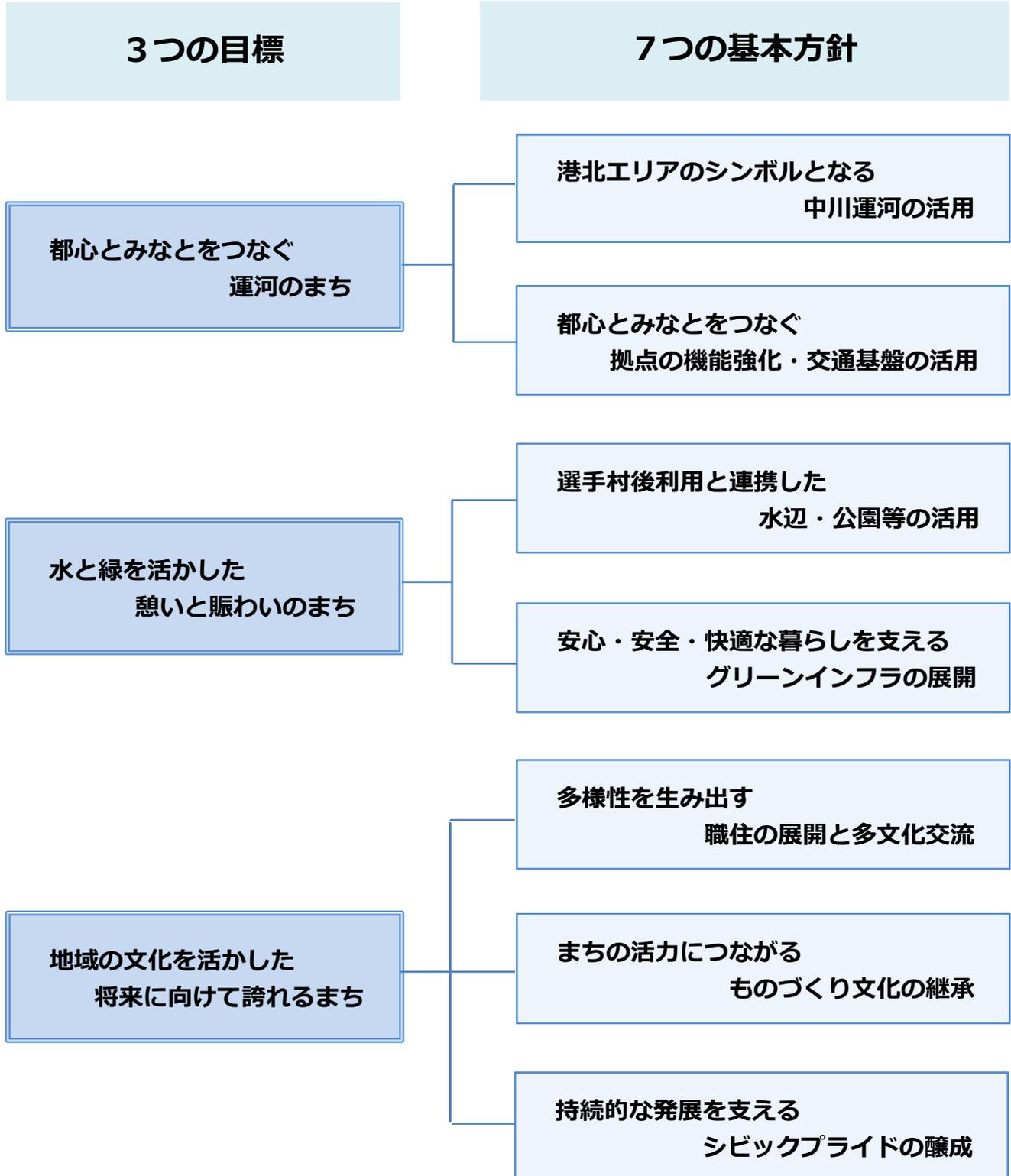
都心とみなとをつなぐ運河のまち

水と緑を活かした憩いと賑わいのまち

地域の文化を活かした将来に向けて誇れるまち

2-3 基本方針

3つの目標を達成するため、それぞれに対する基本方針を立てます。この方針に沿ったまちづくり施策を展開することで、3つの目標の達成を通じ、基本理念の実現をめざします。



都心とみなとをつなぐ運河のまち

エリア内を縦横に巡る運河をシンボル軸と位置づけ交流・創造の場として活用するとともに、充実した交通基盤による優れたアクセス性を活かし、都心とみなとをつなぐ拠点として相応しい「運河のまち」をめざします。

港北エリアのシンボルとなる中川運河の活用

- ・ 運河景観を活かした魅力あるまちづくりを推進するとともに、「港北」といえば誰もが「中川運河」と思い浮かべるように、エリア内を縦横に巡る中川運河、荒子川運河等の特徴に応じ、憩いや賑わいのある空間としてのイメージを発信し、水辺空間とともにまちの活性化を図ります。
- ・ 運河沿岸用地の利用転換や、プロムナード・水上交通の整備などの運河の活用により、運河特有の魅力を創出し、地域とともにある中川運河への愛着醸成を図ります。

都心とみなとをつなぐ拠点の機能強化・交通基盤の活用

- ・ 都心部とみなとをつなぎ、来訪者を迎えるまちとして、アジア競技大会の選手村後利用にあわせて商業・観光・スポーツなど多様な都市機能の導入・強化を検討します。
- ・ 選手村後利用と連携しつつ、あおなみ線や地下鉄名港線の駅周辺の回遊性向上・賑わい創出につながるような港北エリアの優れた交通基盤の活用を検討します。

水と緑を活かした憩いと賑わいのまち

選手村後利用と連携しつつ水辺や公園を有効に活用するとともに、グリーンインフラの展開を進め、市民の暮らしの中で水と緑がより身近な存在として感じられ、安心・安全、快適に暮らし続けられるまちをめざします。

選手村後利用と連携した水辺・公園等の活用

- ・アジア競技大会の選手村後利用と連携し、水と緑に親しみ、スポーツや健康をより身近に感じ、「憩い」「賑わい」につながる環境の創出に向け、中川運河、土古公園や荒子川公園等の活用を検討します。
- ・スポーツ大会や日々のジョギング、散策など余暇や健康づくりに利用できる環境の創出に向け、運河沿川のプロムナードの整備などを検討します。また、名古屋競馬場前駅を始めとした鉄道駅やエリア内の拠点間の回遊性を創出するため、新たな歩行者回遊方策を検討します。
- ・選手村後利用施設と土古公園との連携は、相互の回遊性の確保に向け、選手村後利用の開発内容を踏まえ民間活力の導入も視野に入れつつ、歩行者動線の繋がりなど効果のある施策や土古公園のさらなる魅力向上と利活用を検討します。また、荒子川公園駅周辺のまちの憩いと賑わい創出に向け、荒子川公園などのさらなる魅力向上と利活用を検討します。

安心・安全・快適な暮らしを支えるグリーンインフラの展開

- ・水害や地震発生時の津波・液状化のリスク、火災延焼リスクなど防災上課題となる地域において、防災機能の向上策として、グリーンインフラの展開により、ヒートアイランド対策にも寄与する雨水流出抑制機能の拡充などを検討します。

〔 災害発生時には地域や災害ボランティア団体・支援団体など各種団体と連携し、市民への円滑な情報提供ができるようにネットワークづくりが求められます。また、平常時においても、防災啓発事業や関連事業への参加促進が期待されます。〕

- ・安心・安全な暮らしには、防災・防犯に配慮したまちづくりの観点も重要であるため、市民・地元企業・行政による取り組みが期待されます。

地域の文化を活かした将来に向けて誇れるまち

文化、産業・技術、人といった地域資源を活かし、新たな価値の創造による生活の質の向上と、それに伴い生み出される時間を満喫するゆとりある暮らしが営め、様々な人々の交流を育める多様性があるまちをめざします。

多様性を生み出す職住の展開と多文化交流

- ・ 職と住のバランスが取れた親しみやすいまちの魅力を継承しつつ、子育て・家庭の団欒、スポーツ・健康活動、文化活動等の多様なライフスタイルの創造を図ります。
- ・ 関係機関・企業等と連携し、地域の交流を促進するイベントを開催するなど、企業や地域住民同士の顔の見える関係づくりにより、職（企業）と住（住民）の連携・共生とともに、外国人市民と日本人市民の多文化交流の促進の方策を検討します。

まちの活力につながるものづくり文化の継承

- ・ 名古屋の産業を支えた技術のまちとして、暮らしやニーズに沿った多様で高付加価値なサービスが様々な最先端技術を活用して効率的に提供され、住む人・働く人・訪れる人がより快適に移動できる環境の創出など、新たな技術の活用方策を検討します。
- ・ 名古屋の産業への新しい付加価値の創造につながるような企業の先進技術を活用できる場づくりを検討します。

持続的な発展を支えるシビックプライドの醸成

- ・ 市民・地元企業・民間事業者など多様な主体の参画により、地域のエリアマネジメントを見据えたより良いまちづくりを進める体制づくりに取り組み、シビックプライドを醸成しつつ、地域の価値の維持・発展を図ります。

2-4 将来の土地利用イメージ

基本理念、目標、基本方針を基に、港北エリアでの将来の土地利用イメージについてゾーニング図と基本的な考え方を整理しました。

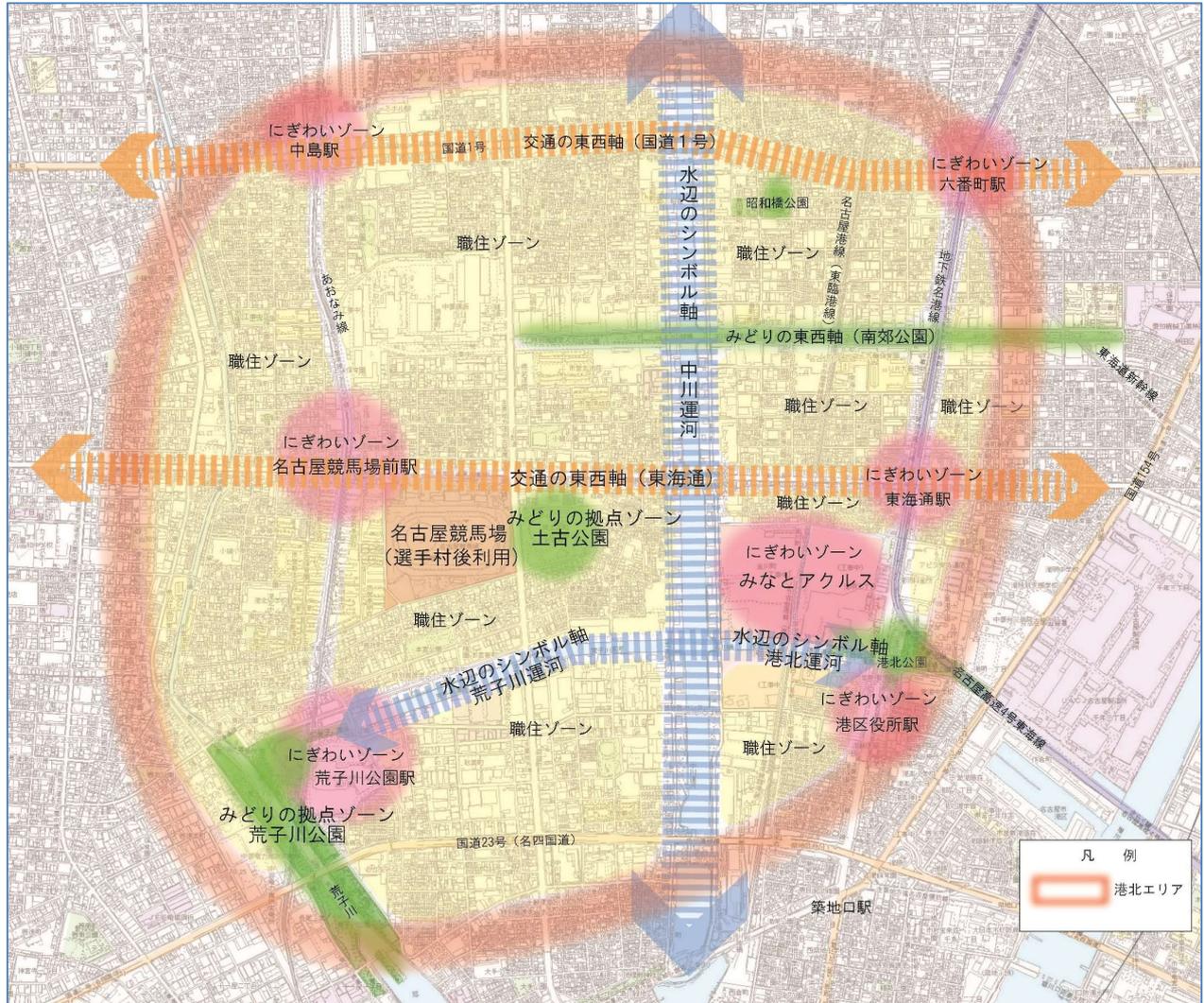


図 港北エリアのまちづくりゾーニングイメージ

●各ゾーン・軸について

■ にぎわいゾーン
○ 駅周辺の商業・業務・地域交流等の活性化を図るゾーン

■ みどりの拠点ゾーン
○ 土古公園、荒子川公園、南郊公園等既存の公園・緑地の活用を図るゾーン

■ 職住ゾーン
○ 職と住が混ざり合う企業と住む人が連携・共生するゾーン

■ 水辺のシンボル軸
○ にぎわいゾーンやみどりの拠点ゾーンをつなぐ水辺を活用した港北エリアのシンボルとなる軸

■ 交通の東西軸
○ にぎわいゾーンやみどりの拠点ゾーンをつなぐ交通の東西軸として拠点間の連携を強化する軸

■ みどりの東西軸
○ 中川運河を中心とした南郊公園でつながるみどりの東西軸

【将来の土地利用イメージの基本的な考え方】

- 地下鉄名港線、あおなみ線の各駅周辺の既成市街地は、商業・業務・地域交流の活性化を図るとともに、子ども・若者、高齢者等の多様な世代が楽しめるようにぎわいづくりを検討します。
- 名古屋競馬場跡地周辺は、選手村後利用事業との連携も考慮しつつ、にぎわい創出や回遊性の向上策を始め、土古公園などの公園・緑地を活用したスポーツ交流や健康増進に資する都市機能を検討します。
- 港北エリア全体の住宅地・工場地は、幅広い世代が暮らしやすく、職と住が連携・共生した安らぎのある住環境を形成するため、防災面にも配慮しつつ安心・安全なまちづくりの推進を検討します。
- 名古屋競馬場跡地、みなとアクルスなどの拠点や鉄道駅が連携できるよう、東海通を始めとした既存の交通基盤を活用した利便性や回遊性の向上策を検討します。
- 中川運河は、港北エリアのシンボル軸となるよう、にぎわい・回遊性の創出に向け、水辺空間の有効活用や運河沿岸の将来的な土地利用転換の促進・誘導、プロムナード整備、景観形成などについて検討します。
- 中川運河の東西支線である港北運河及び荒子川運河を活用し、港北エリアの新たなシンボル軸となるようまちのにぎわい・活性化が図られるよう検討を進めるとともに、荒子川運河周辺にある荒子川公園、あおなみ線などの地域資源との連携を検討します。